# 紀伊國續風土記

高野山部
別録

内閣文庫
和書
類 二九三二二
號
冊 一三〇
函 一七五
架

339

内一一〇三一號

内閣文庫
番號 和 29322
冊數 130 (130)
函號 175 200

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

内一一〇二一號

五之室

大德院 舊号蓮花院聖方
并諸國末寺觸頭

本堂 桁七間梁五間半
万治三年燒火セ 本尊十一面觀音 弘法大師
乃作 済高
僧都持念

護摩堂本尊不動明王 智證大師乃作

内道場本尊阿彌陀如来 安阿彌
乃作

大師堂弘法大師 済高僧
都持念

位牌堂 桁五間 梁三間 本尊地藏菩薩 定朝乃作此堂
諸侯の靈牌を安セ

本坊 桁二十七間 梁十五間 玄關 方三間 表門 四間

日本政府圖書
帝國圖書館藏

通用門三間　寮桁十三間梁三間　倉庫三ケ所　隔室桁五間梁三間　番所桁八間梁三間　鐘楼方二間半　御成門一丈七尺西向なり　裏門九尺　鎮守社神田明神　小社加茂稲荷八幡　閼伽井濟高僧夢ろ龍を冠とせし貴人来て日此後乃大石の處を穿ち清水ありと因て其處を閼伽井とせり

開基弘法大師當院を大師初て登山乃時當山乃山神魑魅を降伏乃ち免軍荼利明王乃秘法を修して結界し給ひし草菴なり此本尊并乃修法乃佛具等今ふ存在せり　第二世濟高僧都も俗姓右大臣多公乃息ふして貞觀十二年正月三日誕生ち九歳にして出家し延喜二年三月十六日勸修寺別當乃補せらも同十年長吏ま任し延長六年十二月二十七日東寺一長者に任し同三十日當山座主ふ任ぜらる天長七年此舊地乃住して大師彫刻の十一面觀音今乃本尊ぞなり を安置し常ま三密乃觀行を凝も一時堂内乃巽隅ふ素光乃中に八葉乃白蓮を現も故ふ蓮花院と号も天慶年中大塔の邊ま三昧堂を創建し又西

谷菩提心院を大師乃舊跡　嵯峨帝第二
乃皇子創建乃靈場なれと彼院をも兼接せり
第十八世快仙僧都を俗姓波多野筑後守義通
の孫義定乃七男なり壽永二癸卯年三月十八
日登山して當院に住せ時小源義重卿此師を
帰依ありて　師檀乃契盟をなし若干乃料を以
く修行の用途に附せらる是　御當家由縁
乃權輿なり明應三甲寅十一月二十八日信光
卿乃末子登山し薙染して證阿上人と号し當
院に住職し玉ふ（第三十世なり）永正年中長親卿登山
ありく坊宇残らせ改造成し玉ふ天文四乙未
年十二月廣忠卿乃命に依く尾州森山陳所よ
り善徳院殿乃分棺を供奉し〻両使（遠山新八郎　林藤助）
登山せ同十三甲辰年三月五日百日大景茶羅
供乃法會を修せし免給ふ弘治元乙卯年瑞雲
院殿七回忌乃時　神君（舊記に御幼名を誌せ）乃嚴
命に依く平日御信仰の藥師如来乃尊像（十二神將
中寅神の三昧に住せ故に寅藥師と稱せ）并小
東府本所高野寺乃本尊是なり

經巻等を納ためゐふ文録三甲午杞三月
神君吉野山より當山人移輿ありて玉輿を止
めゐふこと五箇日　先君乃碑牌を拜せらま
其舊縁を御感ありて　御姓号の一字を
て加ふに天乃字を以て大徳院と改号せ｜免
兜中小籠めゐふ所乃香合愛染明王虚空藏菩薩乃尊像
并大威徳明王を納め給ひ又扇面小畫白梅の下小天
満宮の像讃を自ら筆｜て當院宥雅小下｜給へり
此畫讃は深意の　台命ゆり　西三州進征乃時ゆり親｜く事
りて仁恵を蒙ること大方ならを深重の縁由を記｜
ゐふ又寛永十二年　両府尹小出大和守吉英戸川土佐守正安　将
ふ　台命を受く　御宮　御霊屋　尊牌堂
并小本坊等を造建せんとす同二十癸未落成
を其美麗言を絶せり寛永七年九月二十一日大塔炎上を大徳院并小台命を下｜再建せ｜免
聖方の願に應｜て酒井雅楽頭酒井讃岐守奉書を賜る今よりは存せり同十二年五月大塔の柱
給ふ是を拜謝せるに依て　今よりは存せり　人歩を出を普請の役
極を運登せるの時五百の志方源兵衛川崎治左衛門ゆり是を報する小書
を以てす　今よりは存せり　同二十年六月七日同上棟の時
檀場鐘楼の西に假閣を造て彼の両府尹并大
徳院等是を瞻見す是　御宮建立と同時なり

是を禮祀せるうち大曼荼羅供八十口乃法會を修せ〜む彼の両府命を蒙りて奉行せ〜

御宮下段構 惣白砂

平門 南向なり樹木左右ハ生栄せり

勅使門 震の方ニ有て西向なり欄干の懸燈ハ赤木行馬あり表門を望ハ石階ハ栄草春ハ花さき茂樹秋ハ紅なり

同中段構 惣白砂

應門 南向都て槻造り牡丹等の草花を彫る銅葺なり是より尊牌堂迄數十間石垣の上ハ堅墻あり銅を以て葺

銅門 通用乃門なり巽乃方ハ扉並ハ銅造なり

同上段構 石垣乃上ハ石埒なり

番所 石花表 石燈籠 盥漱盤 石造り銅篭を入

瑞籬 槻造り銅葺花鳥等を彫る

同御門 南向なり槻造り蝦蟆鉄枴等乃仙を彫る銅葺都て美尽せり

御宮 都て槻造り四方ハ欄干三方ハ扉あり正面扉乃上ハ御本地藥師朋光の尊像を額の如く懸る三方の扉倶ハ天人音樂の形姿等を彫る又周圍ハ麟鳳龜等彫ること精微なり内陳ハ極彩色藻井等都て其美麗言を絶せ

御靈屋　瑞籬　同御門　石燈籠　盥漱盤　凡て

御宮の全同也　赤銅湿盤像　其形相細画の如し　鏡石　御宮の西湿盤像の傍に あり此石光りありて人の相貌を移す小真の鏡のごとし

尊牌堂　御宮東の方にあり芳樹院殿已来の歴代并小三家三卿の尊牌を安置

後堂内庫物

大政官符　弘法大師に當山を賜る官符あり山の圖入　嵯峨帝の御朱印あり

軍荼利明王　一鋪弘法大師當山の山神魔魅を降伏し給ひし霊尊なり文禄三壬辰年二月異國征伐の時神君此尊像に祈りを成さしめ給ひ宥雅法印尊命を蒙り大泉と俱に丹精を凝すこと三七日なり則奇瑞あり神君御感斜ならずとなる

三尊阿彌陀如来　閻浮檀金天野庸宗是を納む

愛染明王　虚空藏菩薩　弘法大師の作香合の内に安置す　神君の御持念

大威德明王　弘法大師の作神君の御持念

神君尊影　台德院殿手ずから宥雅に附せらる天海僧正の讃あり

両部大曼荼羅　二鋪十如院尼の筆　般若心經　弘法大師の筆國祖の寄附　丹生記　真濟大德の筆　佛具數品　弘法大師當山開闢の時軍荼利明王の秘法を修して結界ふしたまふ所の法品なり

天滿宮聖号　後陽成帝震筆草書　高野山牛王寶印板　弘法大師の作裏書ふ沙門遍照空書とあり　大曼

茶羅併法具 寛文二十年 御宮正遷宮の時公儀より寄附し賜ふ其后命じて修補を加へ傳法灌頂道具 同時に附せらるること数回

服七條袈裟 八十條同時に附せらる 袍

什物

震翰 陽成院後朱雀院後鳥羽院 書札 北條家并秀吉公の筆 色紙 三牧細川

道觀 烏丸光宣中御門宣綱の筆 觀音 一帖 呉道子の筆尾張家寄附 觀音 一帖 牧溪

の筆 虎画 一帖 安順の筆 虎繪 二帖 慈雲居士の筆 獅子畫 一帖 韓幹の筆

山水畫 一帖 黙庵の筆 山水画 一帖 郭熙の筆 山水画 一帖 備溪齊の筆

鳥繪 一幅 京丹の筆 花鳥画 一帖 周應の筆 三幅物 狩野古法眼の筆 三

幅物 探幽の筆 牡丹画 一帖 探幽の筆 唐子畫 一帖 探幽の筆

扇面 神君の御筆因由前に記せ

梅是毋罪遠流訪秋歎松是飯路本懐顕實躰

梅は飛櫻波枯て世の間に何として梅の難面を於ら苦

同峯形詩 神君當寺に留興中の御詠

峯寺峻嶮

峯有護摩魔雖

峯這乾竹獨尋退難

峯聳碧空黙不塵佛敬進

峯頭石徑更巡〻神因身
峯只扶桑行者緣淨
峯無邪法性清
峯閱胸中

同足利学校三要乃和韻

峯分百億
峯念胎金邪安
峯月照時風拂塵
峯中童子現聖亦諸
峯者正拂

峯峯自北向南巡神因身
峯上役君驅鬼兼色
峯行順逆果妙
峯是如来

三要老禪附驥尾
龔奉和
尊韻

同當院宥雅の跋

學校師翁三要

八句嚴韻襲

奉仰當峯威光

靈鑑〻〻

當山行者司仲子

三拜

屏風一双豐國祭の圖光信の筆　屏風一双元信の筆

一双雲谷等益の筆　公儀より拜領せ　屏風

水戸家寄附　小屏風古筆　公儀より附せらる　肩衝茶

入神君より拜領せ　硯石二太閤秀吉公の寄附

大德院領

中道村郷士　上田百藏

家祖従五位上播磨守橘正尚左大臣贈正一位橘諸兄公二十代乃孫なり中道村榊ヶ城に居を康永貞和乃頃南朝に仕へ〻戦功あり紀州隅田庄を賜ふ後村上帝正平四年閏六月三日倫旨を下し賜ふ持せり今より所十六形一重菊の御紋勅許を蒙る今に用ひ来る

第二代形部丞橘正次正尚の嫡男なり應永の頃上田郷八ヶ村を賜ふ因て上田氏とし二男正興を分家せしむ正次子息おき〻故に以後三代む二男の家に合せ

第五代上田忠右衛門尉正清分家正利の嫡男なり大永の頃河州宮領畠山の幕下に属し句麥花紋の陳幕を賜る永禄九年高野山大衆と和州犬飼山に對陣せ敵卯定院を討捕畠山秋高より感状を賜る又二男尚正別居せ

七代忠右衛門尉正景天正年秀吉公朝鮮征伐の時加藤清正の手に従ひ戦功あり彼地よりおゐて討死せ

八代忠兵衛正守父正景討死の砌幼年にして所領を失ひ絶に扶料のみ残れり織田有樂齋ふ仕ふ

十代傳右衛門正種元和五年國祖君御入國の時一族へ國業内の命あり勢州桑名よりおゐて懇情を蒙る又白銀を賜ふ元和て年十二月朔日一族を隅田組と名附し扶持米三十石を賜ふ慶安二年高野山御宮領に當村を附せ

猶國君に勤仕せ正保元申年扶然化とも持米止む寛永十四年天草嶋兵乱の時士卒二十五人を引て泉州に出馬せ

同村郷士　上田權之助

初代橘正與 従五位上播磨守正尚の二男正次の弟に〳〵家を分ち住せ嫡家正次子息なき故ゝ此家に合せ三代上田織右衛門尉尚正正利の二男なり兄正清又分れ〳〵嫡家を立つ應永三十二年尚正四十一齢ゝ〳〵て厄難を免れんゝ為ゝ志願を起〳〵同年正月曾祖父播磨守の亡霊を牛頭天王と尊祀〳〵一社を建立せ四代忠右衛門尉正康尚正の嫡男なり

同村真言宗 慈眼山 観音寺 一村の菩提寺なり

本尊十一面観音 運慶の作 鎮守社 八幡 鐘楼 方二間半

同村真言宗 西金寺 上田百蔵菩提寺今無住

本尊地蔵菩薩 行基の作

同村真言宗 佛誓寺 上田權之助菩提寺今無住

本尊聖観音 惠心の作 辨財天社 弘法大師の作今せ權之助境内ゝあり

中道村の内

牛頭天王社 上田両家之祖播磨守正尚の霊を祀す呼て牛頭山と云舊ゝ登六丁 三十丁

不動明王 弘法大師の作川ゝ南山中ゝあり岩ゝ彫附せり

一心院中谷

寶藏院（舊号仙和寺寶藏院後寶藏院と号せ）

本堂（方四間）本尊阿彌陀如来

護摩堂本尊不動明王（智證大師の作）

内道場本尊弘法大師（石京の作京都東寺の御影彫刻の時同木を以て造るとなり）

僧坊（桁十三間 梁七間）玄關（方二間）表門　通用門

鎮守社（丹生明神仙和上人造立今此地の惣鎮守なり）

開基貞曉法印は　征夷大將軍頼朝公の三男なり建久八年夏十二歳にして仁和寺勝寶院隆曉法印の室に入り剃髪受戒して貞曉と号せ建保四年當院を建立し右大臣實朝公の父頼朝公の菩提のため貞曉法印に命じて本堂護摩堂多寶塔經堂鐘樓并に十二ヶ寺を建立（此寺塔中の本坊なり）莊園を寄附ありきたり諸堂供養には峯寺僧正聖畏来迎院成寶大僧正勤仕せられ百僧の大万茶羅供を執行せ（庭儀大方茶羅供の用具今に存せ）第二世顔性大僧都ハ俗姓備中守葛山

五郎景倫遁世して貞暁法印の法資となる後
丹生院に轉住し鎮守丹生明神の社を再建し
守護せ其后由ありて此社一山の修理所と成ぬ
什物
高野明神影弘法大師影 共小 真如親王の筆 花鳥画
一軸 松平 一帖 宗 一双 古沼
政宗の筆 圓頓者鑑の筆 尾風津の筆
末寺 和州宇智郡 醫光寺 同村 延命寺
中村
京都下加茂 一条院
○瑞泉院 今廃 七せ

○金剛藏院
本堂 桁七間半 梁三間半 本尊阿彌陀如来 恵心僧都の作
愛染明王 春日の作 尾州荒尾谷木田城守護の尊像なり 池田勝入これを納む
護摩堂本尊不動明王 智證大師の作 昆沙門天 池田輝政の持念
僧房 桁十四間 半梁八間 表門 長屋造り 通用門 同上 倉庫 二ケ所
開基鎌倉法印貞暁和尚 縁記寶藏院小同 中古因幡少
將光仲一宇再建
什物
布袋畫 一幅 猩々翁の筆備前少將光政寄附 花鳥画 一幀 延圓の筆

五字明 一幀 弘法大師の筆 上小我覚本不生の四句の文あり 奥州仙臺片倉氏寄附の副書存在せり

太刀 池田輝政納む

末寺 濃州土岐郡上肥村 遍照院 同 同州妻木村 神宮寺

○西蓮院

本堂 桁六間 梁四間 本尊彌勒菩薩 定朝の作

護摩堂本尊不動明王 智證大師の作

内道場本尊聖観音 運慶の作

○僧坊 桁十三間 半梁七間 表門 長屋造り 通用門 倉庫 二ケ所

鎮守社 天満宮

開基貞曉法印 縁記寶藏院小同一 織田有楽齊坊舍再建セ

什物

地藏万茶羅 一幅大英の筆 彌陀觀音勢至 一幀中將姫黒髪の織物 織田大和守尚長寄附 和歌 一軸 ゥもゝくの御歌 太上法皇震筆極札有

○妙音院

本堂 桁五間 梁三間 本尊妙音天 弘法大師の作

護摩堂本尊不動明王 智證大師の作 阿彌陀如来 惠心

僧都の作

内道場本尊地蔵菩薩 聖徳太子の作

一切経堂本尊文殊菩薩

僧坊 桁十五間 梁八間半 隔室 表門 棟門なり 通用門 長屋造り

倉庫 二ケ所

開基貞暁法印 縁記寶蔵院不同

什物

六字名号 一軸 弘法大師の筆 両部万荼羅 二幅 覚鍛上人の筆

聖教一流 道智院道教自筆 尾風 一双 永徳の筆 灌頂用具 親快

僧都より傳ふ 灌頂記 以範自筆

當寺兼帯安房國安房郡真倉村 光照山醫王寺 妙音院

本堂本尊薬師如来 行基の作 御朱印七十五石八斗

末寺 城州相楽郡南大河原村 大龍寺

五の室

○寂静院 松門院を合せ

本堂 桁四間 梁三間 本尊阿彌陀如来

護摩堂本尊不動明王 智證大師の作

○内道場本尊聖観音

僧坊 桁十一間 半梁八間 表門 棟門造の 中門 同上 鎮守社 八幡宮 倉庫

開基格堂沽印中興松之上人也 紀貫之の曾孫

なり 應永二十一年 紀實次 伊豫の太守 父實平追孝

乃為ゟ再建して 松之坊松門院 實平の法号 と改号せ

什物

書翰 横物一幅定家卿の筆 屏風 一双光興の筆

末寺 江州甲賀郡高峯 福明寺

丹州多紀郡大雲庄中村 蓮臺寺 同 福井村 豊林寺

同 縣守村 栄國寺 同 西木庄村 神宮寺

同 春日江村 圓満寺 同 八上内村 池之坊

同 小多田村 大悲院 同 本明谷村 金輪寺

同 西野村 普賢院

○大住院 今廃ヒセ 輪藏院 同上

○来迎院

本堂本尊阿彌陀如来

護摩堂本尊不動明王

○内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十一間 梁七間　門 長屋造り

花遊院 惣号なり今三ケ寺あり　末寺 遠州城東郡新野村　快雲寺

○彌勒院

本堂 桁五間 梁四間　本尊彌勒菩薩 弘法大師の作

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十二間 梁七間　表門　通用門 長屋造り　倉庫 三ケ所

鎮守社 四社 明神

開基弘法大師此山を開きもひ〳〵時両部大日如来出現あり〳〵勝地とそ此奥小金剛峯と云所なり大師瑜祇塔を建立〳〵もふ時四方四隅に佛塔を埋みもふと當山金剛峯寺の　勅号此由なり第十三世貞曉法印 行状寶藏院に見へたり を元仁元年諸堂及ひ數十箇院を再興せ或時の歌

きさらぎ花色みえぬさきの木もとより雪をうにめて香も白川の
山に咲みなる色のうつらふをこまそ世の人のうらなれとそ
都花者うさ〳〵咲ぬいにあきたるひ〳〵こゝの志きたそめれ
第二十六世頼宥僧都も源義満公の息たり應
永十四戊子三月廿七日寂を辞世の歌う
櫻花ものみなやうはけ〳〵しそをろを嵐にちるこそすき
閑伽井 傳小弘法大師堀せ
ゆゑ鍛字水とりふ
什物
不動尊 一幀弘法大師の筆 弘法大師影 一幀自筆真
然僧正持念

○東光院

本堂 桁四間半 梁三間 本尊藥師如来 傳教大師の作

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊彌勒菩薩

僧坊 桁十一間 梁六間半 門長屋造り 倉庫

開基貞曉法印

末寺 尾州愛智郡高田村 海上寺

同 大喜寺村 大喜寺

○西明院

本堂本尊阿彌陀如来 聖徳太子の作

護摩堂本尊柿不動明王 弘法大師の作

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十一間 梁六間 門長屋造り

鎮守社 善女龍王 倉庫

開基果隣大惠

什物

詩 一軸 文徴明筆 六字名号 一軸一遍 上人の筆

○勸善院 今廢亡セリ

○持寶院 同上

○春如院 同上

極楽堂平等智院 惣号なり 三ケ寺なり

除厄大師堂 方三間半 供物所 桁三間 梁二間

弘法大師大峯山小運歩〳〵ひ〳〵時群生除厄の

ため四十二歳乃容像を自ら造りて吉野川の

流れに投ぜ其像當國學文路村乃川底に止まり

其より川面小夜々靈光を現ぜ村人驚き異しみ

其光る所を尋索るに此霊像を得たり則小堂を創して尊崇せ或時我を高野に移せつゝと夢乃告る因て村人護送しけるに此堂前に到りて俄然として動かせ因て此堂に納めんとするに奇なる哉原より堂中に在せ大師彫刻乃本尊丈六乃彌陀如来忽ち光りを放ちて西天に飛去りぬ是に於て衆人薩埵乃隠見不可思議なる事を感歎し永く此堂の本尊とせ是より后霊験日に著しといへとも殊に除厄を祈るに其

應響乃如し仍て除厄大師と称す

門出辨賊天

弘法大師入唐乃時海陸無難乃た免彫刻ありし尊天なり此よりて今に旅行せるもの擁護を祈る小必感應あり故小門出辨賊天と称せ

○金剛院 極楽堂の内

本堂 方四間 本尊阿弥陀如来 恵心僧都の作

脇士毘沙門天 弘法大師の作 不動明王 弘法大師の作

護摩堂本尊愛染明王覚鍐上人の作

内道場本尊地蔵菩薩

僧坊 桁十二間 半梁八間　玄関　表門 棟門造り 通用門

中門　寮 桁八間 梁二間　倉庫 二ケ所

鎮守社 稲荷大明神 天満宮

開基十阿上人は何里乃人何の姓とふこと不知らず年耳順よりふ或時夢り異僧来りて告て曰く高野山極楽堂破壊よ及へり汝再興の人ふ當きりと覺て奇異の思ひをなし登山して

此堂舎を見るよ梁棟傾斜して荊蕀路を失ひ丈六の本尊は雨露に當りて紫金の色を変せり上人悲涙を押へ看経し熟堂中を見るに棟木の上ふ一の箱あり是を開き見るり大師手つゝ書せるひし堂舎建立の縁起よりて末世十阿とふものの再興をいとゝ上人是を拝讀し信心肝よ銘し感涙袖を潤し弥勇猛の志を勵ませ是を聞し道俗信仰を凝し珍財を投げて堂舎及ひ當院等を再建せとなり抑大師開

山の時此所は地獄の相を現し貴賤驚怖を爰
小大師秘法を修し給へるに火坑忽ち消滅
し清涼の花池となり阿彌陀如来出現し給へ則
ち其像を刻み御衣木伐り所今小阿弥陀ヶ峯と云ふ堂舍を建
立し彼如来を安置し給ふ故に極楽堂と号せ

什物

両部種子曼荼羅 台蔵界弘法大師の筆 金剛界真教大師の筆
五大種子 弘法大師の筆 五字明 同上
目曳大師影 弘法大師道場観の時眼中より放ち光明のうちに大日
光明を

如来現し給へり 真如親王其影像を写し
給ふ世に是を目曳大師と云ふ松平伊豆守の家に
傳へ当
院に納む

如意輪観音 一幅弘法大師の筆 松平
備前守正信の寄附
竹畫 一幅宋如齊の筆毛
利周防守高慶寄附 屏風 一双地
屏風 一双永 徳の筆 屏風 一双源平合戦の繪光
信光小門人中の筆
花器 天竜寺焼青地松 刀銘行光松平五左衛
平右京太夫寄附 門尉近正 所帯同姓
一生是
を納む

○明王院

本堂 桁五間 梁三間 本尊不動明王 智證大師の作
護摩堂本尊毘沙門天
内道場本尊地藏菩薩
僧坊 桁十二間 梁七間 門長屋造り桁十二間 梁二間 玄關
倉庫 鎮守社 稲荷大明神
開基十阿上人 縁起前小見へ〻
什物
十二天 十二幅金岡の筆 屏風 一双光信の筆 茶碗 殊光の作 青山下野
守寄附

末寺 濃州本巣郡長屋村 普賢寺 同 伯州日野郡下渡村 明王院

○照明院
本堂 桁五間 梁三間 本尊阿彌陀如来 惠心僧都の作
護摩堂本尊不動明王 弘法大師の作
内道場本尊釋迦如来 弘法大師の作
僧坊 桁十二間 梁七間 玄關 方二間 門 中門 寮 桁八間 梁二間
鎮守社 稲荷大明神 倉庫
開基十阿上人 縁記前小見へたり

什物

紺紙紺泥理趣経 覚法親王の筆

青地花生 上に同し

天龍寺香爐 松平遠江守寄附

大足院 惣号なり 隠岐入道明寂上人開創十ケ院を建立せ其后足利義持公再興せ今せ唯二ケ院而已存せ

赤寺 駿州志田郡身成村

観音寺

○覺證院

本堂 桁六間 梁三間半 本尊不動明王 覚鍬上人の作 延二年天下飢饉に及へり其時上人立願成就を祈られし本尊なり

護摩堂 本尊愛染明王 大黒天 聖徳太子の作

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十三間 梁七間半 表門 通用門 長屋造り 倉庫

鐘楼堂 鎮守社 辨財天

開基隠岐入道明寂上人 第二世奥教大師

什物

観音繪 一幀讃あり 俱に義持公の筆 山水畫 一幀陸青の筆 大久保家より寄附

○常樂院

本堂本尊地藏菩薩 小野篁一刀三礼の作

護摩堂本尊不動明王 覚鑁上人の作

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十間 梁六間 門 倉庫 鎮守社 昆沙門大王

門基隠岐入道明寂上人第二世常遍上人

什物

地蔵本願経 一巻行基菩薩の筆 古詣墨跡 一軸李太白の筆

○寶珠院 今廢亡也

○宗源院 同上

千手院谷

○正覺院 雲光院合寺

本堂本尊不動明王 弘法大師の作

護摩堂本尊愛染明王 智證大師の作

内道場本尊阿彌陀如来 春日の作

不動明王 智證大師の作

僧坊 桁十三間 梁八間 表門 通用門 寮を兼る長屋造り桁八間

倉庫三ケ所　鎮守社摩利支天源義家公の持念ふして黄金作りなり　岡田
與五左衛門納む

開基範俊僧正なり天喜三年六月一字を艸創して雲光院と号せ

什物

佛舎利　肉附一寸七歩大唐恵果阿遮利より弘法大師へ附属し範俊僧正まて相承せ僧正久住せ故に大黒天光小伊勢両宮の垂跡俱に當院に安置せ

十二天影　十二幅弘法大師の筆　伊勢垂跡　二幅弘法大師の筆

五大尊　一幅兆典主の筆　不動明王　一幅妙沢の筆

水鏡白髪天神影　一幅自畫　屏風　一双光宥の筆　屏風　一雙等益の筆

末寺　勢州鈴鹿郡白木村　大善寺　同　泉州泉郡黒鳥村　長楽寺

同　安明寺

仙昌院　惣号なり　元五ケ院

○密藏院

本堂　桁四間半　梁五間半　本尊大日如来

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十二間 梁七間　表門　通用門　倉庫

開基快深阿闍梨 覚法親王の入室なり

什物

理趣経 一幅菅相丞の筆　観音 一幅周文の筆　山水 一幅心仙の筆　花鳥 二幅

前之の筆　人物 三幅探幽の筆　屏風 一双雲谷等益の筆　屏風 一双永徳の筆

○峻徳院

本堂本尊峻深明王

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十間 梁七間　門　倉庫　鎮守社 高野明神 仙昌院中立箇院の惣鎮守なり

開基 知らず 中興貞雅阿遮梨の時井伊靭負佐直滋一宇を再建し峻徳院と改号す其后烏丸亞相登山し悲母の遺骨を納め霊牌を安置す其詞り曰

洛西常盤のもりのかたより法雲といふ小院をか

なつて我祖の遺跡とそ井伊拾遺直滋朝臣れ
なる處よりとをとめら所今ハ石ま次事あり
てこ乃山ハ分入ぬるかの縁り玉うれる峻徳
院とふにまりてとふ屋き人のあるしなとあれ
侍りて一村雨のうけ難らぬことを祈そひかの霊
前ハ手向せることになりぬ

高野山苔乃下ハて結ひりとときもの乃ちそ
悲母乃石碑り

壽量未必比仙家　長保法身意若何

仏髪俤埋霊地裡　化為工槐待龍華

結ひ置えにりこ名や高野山その暁とそ乃の下露
立なるふ名ゑ乃露のふる袖にかるふ石のなをなれなり
むなしふ命ある世ふぬるひとちきりて出る枚の下道

什物

和歌　一軸烏丸大納言放鴨子の筆　山水繪馬遠の筆

○寶蓮院

本堂本尊阿彌陀如来

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁九間 梁五間 表門 通用門 倉庫

開基寛順和尚 覚法親王の入室なり

成徳院

本堂本尊不動明王

護摩堂本尊愛染明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十一間 梁七間 門

開基 知らず

○全光院

本堂 桁五間半 梁四間 本尊愛染明王 弘法大師の作

護摩堂本尊不動明王 毘沙門天 運慶の作

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十五間 梁九間半 玄関 表門 通用門

倉庫

開基圓尋阿遮梨覚法親王の入室なり　其頃は正法院と
いひ山内家の菩提所にして九代以前大和守
亡父仙昌院殿のため小當寺を初め五箇寺を再
建せ故ゑ此地の惣名を仙昌院と号しける此
後山四方十許町の山林を附し又所領の國ゑ
おゐて田園を寄附せらきけり惜ひかふ慶長
年中五ケ院倶ゑ燒失せ其后吉川藏入佐廣家
當院を再建―正法院を改め全光院と名く又
烏丸亞相當寺全栄法印を帰依し登嶺ありて

雲うつむ高野の峯乃曉ゑなをあひかさき月の影哉　放鵬子

其折から　全栄

おもひきやせらみ紫の戸やまに昍て大宮人の袖をみんとは

什物

○

辨財天一幅　弘法大師の筆　彌陀觀音勢至一幅　惠心僧都の筆
六字名号一幅　弘法大師遠州木原に寄宿し染筆有て館主ゑ授與しるふ一軸なり
一葉觀音一幅　周文の筆　龍見觀音一幅　牧溪の筆
花鳥繪一軸　徐熙の筆　山水繪一軸　心僊の筆　屏風一双　狩野古法眼の筆

屏風一双等 益の筆

○甘露院

本堂 桁五間 梁三間 本尊藥如来

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊釋迦如来

僧坊 桁十三間 梁九間 門 倉庫 鎮守社 辨財天

開基大政大臣良門卿者延喜廿一年一室を造

立一藤原院と号を觀治二年甘露寺為輔登嶺

一甘露院と改号を

什物

文殊菩薩一軸 兆典丞の筆 花鳥一軸 林良の筆 屏風一双 浮雲の筆

○清泰院 今ハ廢亡セ ○慈眼院 同上

○圓光院 同上 ○中祥院 同上

○松壽院 同上

本願院 惣号なり 今二箇院

○般若院

本堂 桁五間半 梁三間半 本尊不動明王

護摩堂本尊五大明王

内道場本尊阿彌陀如来

僧坊 桁十四間 半梁八間 表門 通用門 長屋造り 桁八間

倉庫 二ケ所 鐘楼 鎮守社 加茂大明神

開基 知らず 中興千手上人

什物

地藏菩薩 一軸 満米の筆 天満宮 一軸 元慶の筆

滝見觀音 竹梅 畫 三幅対 信の筆 常和歌 一軸 時雨の歌 ハの宮の筆

屏風 一雙 行信の筆

末寺 遠州榛原郡御前村 通照院

○西方院

本堂本尊阿彌陀如来 此堂内ハ足利家代々の霊牌を安セ

護摩堂本尊不動明王 役小角の作

内道場本尊地藏菩薩 弘法大師

僧坊 桁十二間 梁六間半　表門　通用門　倉庫 二ヶ所

鎮守社 八幡宮

開基役優婆塞小角なり古へ役行者葛城山より大峯へ行通乃時憩息の草庵なり然とも其傳記を失せり中興千手上人を正〻〻観音乃化身なりと傳ふ俗姓行狀等萱堂は見へさり第十七世春深房道朝も東寺より遊て事相を傳へ観智院果寶和尚秘藏の聖教を書寫し終る或時加茂の甲斐乃翁より逢ひしに翁告て曰く入木乃道も高野大師の傳ふる所なり予其正流を繼り是を師より傳ふへきの霊夢あり師勉て怠ることなかれとなり道則歡喜踴躍して悉く其奥旨を得こり道を亦聲字義を講して翁より酬ゆ翁是を聞く倍書法を究むとなり其より三井門主を初め高貴の諸君書法を學ふこと數ふるに遑あらす中ふも狩野探幽同子息二人に筆意を傳ふ其證今より存せり飛鳥井雅章卿を以て辱くも　勅を蒙り額二榜を書し奉るなり

什物

浄土曼荼羅 二幅中将姫の織らきを弘法大師写しとなり如何なる由にや泉州岡部家より傳わり当院へ寄附しける

瑜祇経 千手上人の筆

比丘形八幡宮影 一軸 真如親王の筆河内国誉田八幡の神像なり文録五年一色丹後守義貞是を納む其書に曰く世不平の間真如親王の御筆八幡宮其院へ寄附せ必散失せることとなるもとなり

老人繪 一幅探幽雪の筆 屏風 一双探幽六十三歳の筆 短冊集 一巻古賢数多の筆

末寺 尾州羽栗郡北嶋村 遍照院同 濃州可児郡上野村 徳昌寺

千手院谷

○西生院 舊号王院 愛

本堂 護摩堂位牌堂兼造り 三棟 桁八間 梁四間 本尊阿弥陀如来 春日の作

護摩堂本尊不動明王 智證大師の作

内道場本尊弘法大師 薬師如来 弘法大師の作

歓喜天 同上 辨財天 同上 経蔵 方二間 鐘楼 方二間

同 城州綴喜郡井手村 西福寺

恵果堂 桁三間 梁二間 恵果阿遮梨影一幀を安置せり法大師請来の録に曰く恵果和尚の影を親りかくせり と正治年中 後鳥羽院是を道守僧正 後鳥羽帝の御子なり に賜り僧正こゝを意阿上人に附属せらるゝと 當寺代々祕蔵せり又僧正帝都を遁れ當院に寓居し建仁三年三月十五日掩化せり恵果道守意阿三師俱に十五日を以て遷化の日を同じうし貴賤これを奇とせり

僧坊 桁二十間 梁十間 玄關 表門 通用門

寮 桁十二間 倉庫 二ケ所 鎮守社 稲荷大明神

開基濟信大僧正は俗姓左大臣源雅信公の息根本仁和寺別當喜多院に住せ故に北の院僧正と号せ長和元年二月金剛峯寺座主小補せ同二年東寺一長者兼ねて法務に任せ寛治四年二月二十七日牛車の宣旨を蒙る是法家牛車の初例なり治安元年此院を草創し專ら愛染の秘法を修練して愛王院と名く同三年五月聖衆来迎院に移轉し奥院廟前小拜殿等を造営せ（安記に見へたり）く彼院の縁 長元三年六月十一日寂第七世意阿上人に二條家の息にして後鳥羽院御子宮僧正道守の入室當寺の中興

なり其頃大友左近將監能直坊舍再建し菩提所と成し西生院と改号し豊後の國に於て傳燈の料永七百貫文を附せ

什物

歡喜天一鋪弘法大師の筆　出山釋迦一鋪龍眠居士の筆

色紙一軸陽成帝震筆　達磨畫一幅周文の筆

光明院惣号なり三ケ寺あり

○本覺院講坊と

本堂桁七間梁五間　本尊不動明王智證大師の作

護摩堂本尊愛染明王弘法大師の作　佛舍利三粒弘法大師請来

内道場本尊阿彌陀如来

僧坊桁十五間梁九間　玄關　表門　通用門

寮桁五間梁二間　倉庫二ケ所　鎮守社天満宮今と三ケ院の惣鎮守なり

開基詳なら中興行空上人初く衣を天台に染め后に錫を南山に止む釋書に曰く行空者世小

一宿上人と稱せし五歳七道行遍せしとゝふこと
なし（所居兩夜を經さる故なり）若道路に迷へも天童
道を教へ渇を小及へも天女水を與たへ病苦
ゆゝる時も天藥自から到り供をかけも甘露現
前せ年九十ゆ〳〵寂をとゝ終に此地に道場
を建立（建立の檀主も待宵小侍從となり）常に法花經を講讀
せ故に世人舉〳〵講坊とゝふ
什物
○不動明王（一幀妙澤の筆）鴈（一幀惠宗の筆）屏風（一双等益の筆）
屏風（一双安信の筆）

○上智院
本堂本尊阿彌陀如来（聖徳太子の作花山法皇の寄附）
護摩堂本尊不動明王
内道場本尊地藏菩薩（弘法大師の作古へ光明院本堂の本尊なり）
僧坊（桁十三間梁七間）
開基行空上人（緣起本覚院に見へたり）中興深觀大僧都（花山法皇の王子なり）
門
倉庫

什物

山水畫二幅文真の筆　屏風一双等顔の筆永徳の筆　屏風一双永徳の筆

法花經第十一の巻弘法大師の筆　淨土經弘法大師の筆　紺紙紺

泥法花經第三第四の巻菅相丞の筆

末寺　勢州安濃郡榎本村　東日寺

○南藏院

本堂　桁五間梁三間　本尊阿彌陀如来

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊弘法大師

僧坊　桁十四間梁九間　表門　通用門　寮　桁五間梁二間

倉庫二ヶ所　鎮守天満宮花山法皇の造立

開基行空上人　縁起本覚院ゟ見へたり

什物

達摩畫一幅顔輝の筆　西王母獅子牡丹畫三幅對探幽の筆

西小田原

○花折院

本堂 桁五間 梁三間半 本尊聖觀音 智證大師の作

護摩堂本尊不動明王　弘法大師

僧坊 桁十三間 梁七間半 玄門　表門　中門　通用門

開基明釋上人は定家卿の曾孫正二位大納言為世卿かり深く　朝庭の交を厭ひ出塵の心厚く嘉暦四年の秋此山に来り安吉の梵窟を結構し久住しもふ舊跡なり觀法入定の閑暇は尋花を手折く佛はなん供養しむつり或時櫻花の盛る枝捧んとて

たゞ為は折とかもしほさゝらさな三世の佛とゆる勢一枝

と一首の歌を詠せられしより　匂の中ゝ為世花折の四字を顕むせり

寺を花折院と號す暦應元年八月五日　齢八十有九にして薨せ又庭面は老樹のさゝらいり世の人是を為世櫻と呼ふ近頃冷泉中納言為綱卿彼の歌を感嘆ありく

をる花はそ〻ふの色香こそ世をふる事は名は殘りけき

と詠し手向うきけを累世契緑乃情今は淺うして

什物

伊勢物語 全部一巻 定家卿の筆

○林松寺 花折院の支配客坊なり 舊号櫻本坊

開基圓觀法師も為世卿乃近臣なり卿の道世り及ひ〻共に藥染して給仕せしいふ中臣權律師快昌も播州林松寺に住し後當寺に来りて坊舍を再建し修禪して林松寺と改名せ

○萬生院

本堂 桁五間半 梁三間半 本尊阿彌陀如来 恵心僧都の作

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊馱都不動 弁教大師の作 弘法大師

僧坊 桁十三間 梁七間半 玄開門 長屋造り 倉庫

鎮守二社 天満宮 辨財天

開基信覺大僧正 成尊僧都の附法なり 延久二年庚戌春

三月此地に住して一宇を艸創せらる 康平三

庚子年寂せ

什物

来迎彌陀 一鋪千觀内供の筆 四社明神影 一鋪土佐将監の筆

國宗刀 赤松圓心是を納む　正信刀 浅野内匠頭長矩所帯大石内蔵助良雄是を納

末寺 播州赤穂郡正福寺村　正福寺

○普賢院

本堂 桁五間 梁三間　本尊阿彌陀如来

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十三間 梁七間半　門 長屋造り　鎮守社 八幡宮秋葉権現 現愛宕権現

開基勝覺權僧正 範俊僧正の入室なり　寛治七歳此地に住して求聞持の法を修せし草菴なり

○西藏院 今ハ廢 七そ

○中性院

本堂 桁七間 梁三間半　本尊阿彌陀如来 聖蓮上人捧負の像なり

護摩堂 方二間　本尊不動明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十五間 梁九間　玄關 二門四方　表門　通用門

倉庫 三ケ所　鎮守社 神集大明神

出世兒大黒天 弘法大師の作長三寸むりし

の伽藍を創造せしめ給ふ時威靈の童子出
現して曰我をられ因位の摩訶伽羅天なり
教王及び堂塔伽藍を護持せんりきめ此り来
きり庶幾を永く法施を受んと語り玉ひし尊
容を大師彫刻ありて傳燈の光徳相兼崇敬し明
快僧都より當院開祖聖蓮上人に附囑ありて
秘印明口決悉く授典を（今師資相兼唯一人の秘口）上人
堂舎造営の時年甫二十未満の人躰を現し
土木の用を助け給ひしこと百余日にして凡人の
所業にあらざれば皆奇異の恩をなせり又米
粟貨泉自ら集りて尽事なし是偏に尊天擁
護の徳なりとそ時に當寺第七葉贈僧正頼諭
法印（後根来山座主）北尊天の靈験殊勝なることを奏しけれを
敵信深く正和年中 勅して出世の二字を
贈られ賜ひしより出出兒大黒大神と号そ

開基聖蓮上人は 葛原親王（桓武帝の曾孫）の曾孫な
り父の家は 清和天皇御持念の弥陀如来（慈覚
大師の作）を傳へ内佛殿に安そ父母如来の靈夢
を感して兒（七歳）を山階寺明快僧都に投し彼の
如来を附して生別の記念とそ薙髪して中性
房聖蓮と名く性謙遜にして名を隠し徳を潜
む常に熊野権現を信して層巒を遊歴そ奇瑞
多端なり人呼て半権現といふ掩粧の地をト
せんと欲して如来を捧負して此嶺に躋る時

康和辛巳春残雪路を埋み藜杖顛連し漸く麓
月を帯て夜半に絶頂に到り暫く一場に依く
如来を巖上に安して憩息せ時に白髪霜眉の
異僧来て聖蓮を譚慰して曰く余預免子ゝ登
山を知れり當に此地に住せつゝ此處を内の
八葉覆鉢の峯なり前も蓮花院後ろは禅定の
嶽自利ゝ他の力を戮つゝと言終て去りぬ聖
蓮思に如来の安置せ蓮花ならも然なり沙門の
所居せ禅定ならも最なりと遂に凌雨の二字を

當山三密相應の観床とせ是當院の盥觴なり

什物

曼荼羅圖 金胎二幅 後宇多法皇震筆法務少慎准三后裏書なり
天満宮聖號 一鋪 理源大師の筆 醍醐六幅の内 天満宮聖號 一軸
近衛三藪院の筆 彌陀名號 一鋪 弘法大師の筆 脇書に曰く承和元年三月十
又立自空海 十一佛影 一鋪 大納言金岡卿の筆十一佛を十三佛の内彌勒虚
空藏二尊を除く 八祖龍猛龍智金智不空各一幅 無畏一行惠果弘法 影興教大
師の筆 弘法大師影 一鋪 四所丹生高野自筆 氣比嚴嶋明神影
一鋪 弘法大師の筆 羅漢画 一鋪 兆典主の筆 観音繪 一幀 收溪の筆 出

山釋迦畫一軸 探幽の筆 詩歌一軸 後陽成院の震筆 花鳥画一軸 狩野古法眼の筆 平安城圖繪屏風一双 土佐光信の筆 一谷合戦圖繪屏風一双 同筆 唐子畫二幅 對唐商喜の筆 探幽極札あり

末寺 武州忍城主松平下總守内 金剛寺 同 江戸下谷三線堀同家内 徳昌院

○寶積院 今ハ廢 ○池之坊 上ゟ同一

○東壽院 上ゟ同一 ○遍照院 上ゟ同一

○玉藏院

本堂 桁五間 梁二間半 本尊阿彌陀如来 春日の作

護摩堂本尊不動明王 智證大師の作 辨財天 弘法大師の作

内道場本尊馬頭觀音

僧坊 桁九間 梁七間 表門 長屋造り 桁九間 梁二間 通用門 表門と同棟

倉庫 方三間

開基番應上人 姓族を知らず

什物

冨士山繪一幅 探幽の筆 屏風一双 山雪の筆

○阿彌陀院

本堂 桁六間 梁四間 本尊阿彌陀如来 安阿彌の作 脇士毘

沙門天 興教大師の作

護摩堂本尊不動明王 興教大師の作

内道場本尊愛染明王 弘法大師の作 歓喜天 稲垣道善の寄附

弘法大師

僧坊 桁十間 梁六間 隔室 表門 長屋造り 桁八間 梁二間 通用門

表門と同棟 倉庫 未迎池 因由後記せ

開基興教大師も時々別行修禅の舊跡なり 大

治年中大伽藍創造の願を起し信貴山より通夜

の時夢中に毘沙門天出現ありて其尊容を彫

刻して秘法を三七箇日修行せらる又康治二

年彌陀の秘法伝修ありて如来池中 今の未迎の池なり

より未迎むかへり故に阿彌陀院と号せ

什物

聲明集 草書なり 覚親王の筆 香筥 堆朱なり 大久保伊豆守忠寄附 和

歌一軸 近衛三 直庵の筆 寒山拾得画一鋪 雲谷等益の筆 鷹画一 頓

○養壽院

本堂 桁五間半 梁三間半 本尊阿彌陀如来 春日の作

護摩堂本尊不動明王 興教大師の作 白河法皇御持念

内道場本尊毘沙門天 傳教大師の作

僧坊 桁十二間半 梁七間半 表門 長屋造り 桁十五間 梁一間半 通用門

上ノ同ノ 倉庫 二ケ所

開基信運阿遮梨 念範遮梨附法の資なり

什物

種子曼荼羅 金胎二鋪 弘法大師の筆 十六善神 一鋪 兆典生の筆

五大尊 一幀 興教大師の筆 般若心経 一軸 聖徳太子の筆

末寺 紀州日高郡愛川村 遍照寺

○智善院 今ハ廃 ○吉藏院 上ノ同ノ

實相院 惣号なり 古へ十八箇寺今五ケ院

本堂 五間四面享保六年冬焼の后建立なり 本尊阿彌陀如来

脇士觀音勢至 延暦寺惠心院源心僧都一刀三禮の作古へ鎌倉實相寺よ

り送り来るとりや今龍池院本堂の本尊是なり三重塔三間四面天正十年田録の后再建なり本尊金剛界大日如来理源大師閑眼の像なり今清涼院内道場の御影堂二間四面天正年中焼失の后再建なり本尊弘法大師画像真如親王の筆今泰雲院に安せり閑伽井弘法大師自ら掘せ給ふとあり鎮守社氣比明神古へ塔の乾にあり今池邊に移祀小社善女龍王池邊にあり叢祠頼賢僧正池邊にあり千手観音弘法大師の作埋源大師持念の像なり延喜年中比院に安置ありてより今に八月三日院中巡寺に鎮座年〻五月十八日観音の法講を修せ是此院の式例なり

開基弘法大師此院の南方に善女龍王鎮住の池あり弘仁九年夏六月大和州人民の願に應し大師雨を求んとして此池の邊に草庵を結構し請雨乃祈をなしかば故に名付て雨の坊と云又理源大師爰に在して堂塔伽藍を草創し密供修練ありしと礼り中興頼賢僧正と意教上人と号せ俗姓大隅守康光の息醍醐寺成賢僧正の入室なり師僧正乃宿願に代て當山に攀登して閑居の地を求めけるに幸に此聖跡あり然れとも堂塔悉く破壊しけれ共深く悲みて修補を專らにし法流を傳受

を印可灌頂の人三百有餘とりせ時は鎌倉の二位の尼公上人に帰依あり て元仁甲申大和州箸尾の荘を傳燈の料に附せらるし實相院尼公の法名實相院と号せ つ と名せ人蓄号を呼會て雨乃實相院と稱せ然るに天正十年舞馬乃災に羅て諸堂経藏等焼亡せ后又本堂鐘楼山門再興ありと雖とも享保年中又炎焼せ今五箇院乃ミ現住 て意教方の法流を續傳せ

○桑雲院

本堂 桁五間 梁四間 本尊不動明王 智證大師の作

護摩堂本尊愛染明王 摩利支天 神君の御持念遠州光明山より納む 副書有り

内道場本尊地藏菩薩 小野篁の作 龍猛菩薩像 弘法大師の作 辨財天 弘法大師の作 弘法大師像 長四寸七歩 弘法大師三国の土を集め作り給ふ世に双ひなき靈像なり 讃州誕生院に安置あり を由ありて雲州尼子の家に移置 元就當院に舊縁ありて自の家に流り厥后晴久の世毛利元就の画と添く寄附あり とそ影元就在判寄附乃書今に存せ

僧坊 桁十七間 梁八間 長屋造り 倉庫

玄門 二間 表門 通用門 桁廿間 梁二間

開基理源大師第二世延敞僧都 理源大師附法の資なり 延長六年十二月十三日寂齢七十三 中興意教上人なり 由来惣号

實相院 ヨ同ー

什物

色紙 神君の御筆さゝの山の歌 洛橋道順極札あり 色紙 二枚袖ひちての歌

詩草書 台徳院殿の御筆 洛橋道順極札あり 韓退之詩 一軸趙子昂の筆 洛橋道順の極札あり

花鳥画 一幀四明李辰の筆 花鳥画 一幀吳都王維焦の筆

山水画 一幀自讃あり 俱ヨ董其昌の筆 紺紙金泥心經 嵯峨天皇の筆 天満宮影 一鋪自筆 佐々木高綱影 一鋪自筆 傳来

佛舎利 青白色なり 毛利元就納む 茶碗 利休鉄銘あさゝ山 茶入 村雪

## ○清凉院

本堂 桁七間 梁五間 本尊阿彌陀如来 運慶の作 嘉暦年中霊夢ヨ依て當國那賀郡小倉庄満屋村天満寺の本尊を當寺に迎移ー今ヨ彼村より當寺の本尊を修補せ

護摩堂本尊不動明王 覚鑁上人の作 辨財天 弘法大師の作

内道場本尊大日如来 古へ惣堂の本尊なり

僧坊 桁十六間 梁十間 玄關 方二間 表門 長屋造り 通用門 表門と同棟

中門 二ケ所 數寄屋 一ケ所 倉庫 二ケ所 鎮守社 稲荷大明神

開基理源大師第二世一定律師 俗姓を知らず 天慶八年寂す

○来由實相院は全同せり

什物

十種神寶 一軸 光口決あり 倶は弘法大師の筆大師より是を源仁に傳ふ 真雅僧正に傳ふ僧正又理源に傳ふ理當院より傳へて代々珍藏す

意教上人影 一鋪 自筆

紺紙金泥法花經 全部八軸 慶長三戊戌年井伊直政寄附す

寒山拾得画 一幀 狩野古法眼の筆

花鳥画 一幀 探幽の筆

屏風 一双 雪谷等與の筆

書翰 國祖居の筆

末寺 泉州鳥取庄下出村 極樂寺

同 同村 延命寺

同 同在黒田村 觀音寺

同 同庄波有手村 藥師寺

○龍池院

本堂 桁廿間 梁三間半

本尊阿彌陀如来 源心僧都の作

護摩堂不動明王 願行上人の作

○

内道場本尊地藏菩薩 春日の作 太元明王 播磨守平忠盛の飯依淺らなる息子清盛拳登ありしとき當寺に宿りを成し｜て真言陀羅尼等を受らき平家の秘藏せる處の明王を奉納｜藝州瀨野の庄を寄附賜り年々貢ありしかとも福嶋左衛門尉政則藝州の司となりてより其事止ぬ

僧坊 桁十三間半 梁八間半 鐘樓 方二間 表門 長屋造り 鎮守社 辨財天 倉庫 通用門 表門同棟

開基理源大師第二世玄照律師 聖寶尊師の入室也延長二酉年八月三日寂 中興頼賢僧正 来由實相院に同そ

什物

佛法僧鳥詩 弘法大師の筆 松毛鈴 頼賢僧正の所持 佛舍利 頼賢僧正の持念 色紙 定家卿の筆 詩一軸 趙子昂の筆 語一軸 醫師道三の筆

○

龍泉院

本堂 桁五間 梁四間 本尊藥師如来 運慶の作

護摩堂本尊不動明王 毘沙門天 弘法大師の作

内道場本尊如意輪觀音 天竺の金佛 十一面觀音 惠心僧都の作 大黒天 傳教大師の作

僧坊 桁十三間半 梁七間半　表門 長屋造り　通用門 表門と同棟

中門

開基真慶律師 理源大師の法資なり 正平二年寂　中興頼賢僧正

来由實相院と全同なり　末寺 備後國御調郡三原村　奥藏院

○法雲院

本堂 桁五間半 梁四間　本尊阿彌陀如来

護摩堂本尊不動明王 弘法大師の作

○内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十二間半 梁七間　門　倉庫

開基道憲法師 理源大師の法の資なり 附　中興頼賢僧正

由實相院と全同せり

什物

布袋 一幅一休の筆　三幅物 守信同子息 守政 歳十一 舎弟守定 歳九 の筆

末寺 泉州春木川村　地藏寺

湯屋谷

○善壽院

本堂本尊阿彌陀如来

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十間半 梁五間半 玄關 方二間半 倉庫 二ケ所 門 長屋造り

開基法藏僧都 一定律師の附法 安和二年入寂 中興快尊僧正

も熊野入鹿の後亂あり 建保三年登岫 同五

年復戒壇

○證菩提院 今ハ廢亡セリ

如来堂

○相應院

本堂本尊阿彌陀如来 黄金鋳像なり 此如来の因由を尋るに

聖徳太子鋳造し給ふ 信州善光寺なる安置

あり 或時水内郡權田川原形部太輔了

告て曰く汝の馬を以て我を高野に送る

し 霊告新たなるに依て形部感喜し則當院

に送り来る其馬忽ち馬頭觀音と化現せ

なり 今門前の叢祠是なり 故此地を如来堂

と云ふ 委しくハ善光寺縁記に見へ

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十三間 梁五間半 門 倉庫二ケ所 鎮守社 馬頭観音

開基観弘僧都 俗姓知らせ

○林仙院

本堂本尊阿彌陀如来

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十二間 梁七間半 玄關 倉庫 門

開基 祥ならせ 中興永林阿遮梨 適智院義範僧正の法孫なり

往生院谷

○蓮花寺 峯の道場といふ 當山八葉の其一葉なる故なり

本堂本尊綱引觀音 永仁年中武藏の國主道世て當院に住し忍阿上人と号せ一時八月十五日觀法座禅しけるに正しく高野明神影向ありて告て曰く汝讃州綱手に行て五色の舍利十一面觀音を求見せへしと上人神告に随ひ彼地に到り觀音并に舍利を得て當寺に安置せ其傳を授せるに弘法大師入唐の時自ら彫刻ありと持念し給ふ虚像なり或日恭風逆浪の時綱を取りて難を救ひ給ふとかや依て世

に綱引の観音と稱せ

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊五色舍利 縁記前に見へたり

僧坊 桁七間 梁五間 門 倉庫 鎮守社 高野明神

開基青蓮上人 第二葉性信親王 後ち光臺院に轉住せ

○什物

涅槃像 一幅 蘇漢臣の筆 弘法大師有髪影 一幀 自筆

西谷

○菩提心院 又八月上院とも云ふ 今二名ともに此地の惣号となる

大師堂 世に日輪大師と云ふ 嵯峨帝第二の皇子建立 玉ひし后熊野梭本豊前守再建せ 阿彌陀堂 美福門院建立 經堂 上に同し 灌頂堂 濟高僧都栩成寶僧正再建 陵 美福門院の尊棺を納む 閑伽井

天文寛永慶安三ケ度堂宇燒失し今舊跡れみ残もり本尊及ひ法具高貴の尊牌等四ケ院配當て守護せ 鎮守社 八幡宮なり 弘法大師入唐の時豊前國宇佐八幡宮に祈誓あり 弥陀の名号光を放ち舟に現せ大師則ち舟板に写し玉ふ故に舟板の名号と称せ又八舟板八幡ともいふ

此地に弘法大師日輪觀を修せし霊場なり其

姿像を道與大師彫刻なりと後世に残せり其
后　嵯峨帝第二の皇子深く信仰し給ひ
て大師堂并に十二の坊舎を造立なさしめ給ふ
又如意の尼も常に阿彌陀如来を信仰奉り
て弘仁年中尊像を弘法大師に乞せ給ひけれハ
則画して尼に授け給ふも弥信仰浅からぬ禁
中の秘蔵と成り給ふとかや天長の頃　美福門院
堂宇を再建し彼の彌陀の尊像を安し給ひ
門院薨御の後尊棺を分ちて此院に納め奉る

俊成卿

動ふ其時の歌に
遠く礼拝て思ひ焦るこそ悲しけれ高野の山の寺の御堂に
尊棺の菩提心院に渡らせ給ふを拝して　西行
寺ゆゑ君思ふ五つの雲たちて心の月のうてなにぞ
又濟高僧都者　勅有りて東寺の長者に補せら
き當院に住し蓮花院（今の大徳院なり）を兼接し此谷
乃数箇寺を再建ありて故に僧都を以て此塔中
の中興とせ

○聖衆来迎院

本堂（方五間）本尊聖観音（聖徳太子の作）佛舎利一粒

護摩堂本尊不動明王（智証大師の作）能作性一顆

開基濟高僧都も延喜六年十二月晦日當山の座主に補せらる第二世貞譽律師天慶七年六月二十一日同〃〃座主に任せ第三世雅慶大僧正長徳四年九月十七日同〃〃座主に任せ以上二師も勸修寺宮に住〃當院を兼接せ第四世濟信大僧正俗姓左大臣源雅信公の息なり仁和寺別當に〃〃此院に住せ依て此院の僧正と号せ長和元年十月勸修寺の長吏に補せらる同年二月當山の座主に任せ治安三年五月當院に入住せ同十月奥院廟前に初て拜殿（桁四間 梁三間）并に橋を造営〃萬寿四年三月二十一日迄毎日奥院に参籠〃拝殿に於て秘法を修せらる同四月勸修寺に帰る長元三年六月十一日遷化せ齢七十八在住四年なり五世深覺大僧正長元八年同〃〃座主に任せ寛徳元

年九月十四日入寂在山六年なり六世信覺大
僧正ハ東寺の長者法務を兼七世嚴覺大僧正
八世寛信法印同上九世雅寶大僧都以上四世も
勸修寺より住して當院を兼帶せ第十世成寶大
僧正も當山の座主より補せられ兼久三年三月
當院に入住し司職たり　高倉法皇御願
より依て奥院より於て長日舍利講を始行せ當國
神野真國の庄を以て僧正の用途より宛て行せ
る宣旨今も存在し大德院より秘藏せ　專ら山徒より法儀を傳る故
より峯寺僧正と稱せ安貞元年十二月十七日遷
化せ石棺を　美福門院陵の側ちらより葬り廟
碑を彫建せ堂舍及ひ僧坊慶安の田禄より羅り
今より再建ならせ本尊并より座主の尊牌等四箇
院輪番より守護し供養せ

○不動院

本堂桁六間梁四間本尊不動明王弘法大師の作傳より曰く承和二年
不動地藏二尊を彫刻ありて不動尊を當院
に納め地藏尊せ小坂坊ら安置しふとなり

護摩堂本尊愛染明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十三間 梁八間 玄關 表門 通用門 長屋造り

倉庫

開基濟高大僧都 未由来迎院より見へたり

什物

弘法大師等身影 嵯峨帝の勅に依て真雅僧賢當院に隠遁の時納めらきたり 其后勸修寺正の染筆なり 前大僧正快寛海大僧正の命に依て慈尊院真昭僧正登山修補せらきける 佛舍利 小野篁寄附 大般若経 弘法大師の筆世六行

附法記 勸修寺宮雅實 僧正より傳 出世顧不動尊 平清盛六位小在せ時夢中に現し玉ひしを頭の血を以て写せしに靈尊なり 震翰 後光明院和歌一卷 行基傳教弘法智証玄賓佛國西行空也高辨夢窓婆羅門以上十一人の筆 色紙二紙一軸定家卿の筆 不動鈴 伊勢三郎の息小塩一丸寄附 屏風 一双雪庭の筆

末寺 丹州桑田郡松尾村 成願寺 上吉田村 同 惣持院 板橋村 同 遍照寺

○妙法院

本堂 桁五間 梁三間 本尊大日如来

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十二間 梁七間半 表門 長屋造り 通用門 上に同し

開基濟高大僧都 因由未迎院より見へたり

什物

辨財天 弘法大師の筆 表装蜀紅錦 紺紙紺泥心經 道真大師の筆

色紙 近衛信尹公の筆

○松雲院

本堂 桁五間 梁三間 本尊阿彌陀如来 春日の作

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十三間 梁七間半 表門 長屋造り 通用門 上に同し 倉庫

開基濟高大僧都 因由未迎院より見へたり

什物

荒神 一軸 弘法大師の筆 弘法大師影 一幀 真如親王の筆 出山釋迦 一幀 兆典主の筆 墨画 三幀 芝三成の筆 連歌抄 宗祇の筆 七種連歌

飛鳥井宗世の筆

末寺 丹州舟井郡東又村 松岩寺
同 水原村 神宮寺
同 和州吉野郡湯川村 不動院

○吉祥院
本堂 桁六間 梁三間 本尊阿彌陀如来
護摩堂本尊不動明王
内道場本尊吉祥天 運慶の作 弘法大師

僧坊 桁十二間 梁六間半 表門 通用門 倉庫
開基濟高大僧都 由緒来迎院に見へたり
末寺 和州吉野郡西川村 仙龍寺

○理趣院 今ハ廢亡セ
○阿彌陀院 上ヨ同
○善性院 上ヨ同
○戒光院 上ヨ同
○大寶院 上ヨ同
○最光院 上ヨ同

勅願所後深草山安養寺成佛院 菩提堂といふ惣号なり 今此塔

中は七箇院なり

本堂 方五間今は假堂方二間 本尊千手觀音 秘印に注せる天竺間浮檀金の鑄像御長一寸八歩 同前佛 作知らず生身のごとく言語なり尊像なり

御影堂 方二間なり 弘法大師 前佛 作知らず 多寶

御影堂の影 真如親王の筆

塔 方三間二重の塔なり 正徳三年冬上旬再建なりしも今礎のみなり

本尊金剛界大日如来 弘法大師の作 閼伽井 鎮守

三社 四所 丹生 高野 嚴嶋 大明神 天満天神 比明神 春日 經堂 一間六方なり

護摩堂 方三間 本尊不動明王 作知らず 橋 欄干附き

鐘樓門 庫藏 方二間 惣門 唐門 麟 鳳 龜 龍 彫工左甚五郎

蓮池 正喜二年飢饉なりけるに此池の蓮根を掘りて飢人に施せる其時本尊觀音の左の御手失せるを此池中より掘出せり諸人奇異の眉をひそめて尊みけり其以来今に到りて此塔中に蓮根を食する夏かくさ四間なり是則上品上生の琵琶形の額を納めたる石函を掘出せし地なり 今の鎮守社の廏是なり

近衛家虚碑 惣門の内東方にあり 代々の尊碑なり

鉦鼓ヶ芝 園一間程の圓芝なり 因由與に見へなり

開基 詳ならず 中興圓慶阿遮梨 俗姓知らず 性隱逸にして風塵を厭ひ交友を絶し斯に居住して密乘を薫練せ一夕縉紳の偉人来て告て曰く此地

も前佛の聖跡後賢の興起なり今卿一ら成佛
を志さも當よ成佛院と名くつ我も是高野
明神なりと因て成佛院と名つく唯五の室谷
乃明寂上人と相好し又覺鍐上人よ謁して談
話月輪觀に暨ふ上人乃曰く行者の信心諸佛
の大悲慈光圓明よりて師の曰く今日心地
洞徹の觀念射的せり全く鍐公の力よ憑るの
みと保元元年八月十七日朝より食せも夕よ
及も端坐合掌して俄再として化も時に慶の

門ら苅萱道心と云ものあり姓ハ藤原名も重氏
筑前州苅萱莊の人なり仁平中に年甫二十一
にして忽ち世理の無常を觀潛り當山ら攀
て慶の門に入く難深し圓空と名く世呼て苅
萱道心といふ（因て今に北地を萱堂といふ）婦及び世子石堂
麿慕ひ追て當山よ登り来る然るに女人禁も
る地なれも婦ら麓なる学文路村ら居て哀傷
止もして病死す麿ハ父よ從く落髮して道念
と名く上人掩化の后圓空ハ善光寺乃彌陀を

慕ふて信州より往〳〵草庵を結ひ念佛を道念も
又彼州に往とき第二世行慶律師者姓ハ中山
氏洛陽の産なり圓慶を師とし事ふ常ハ卧寢
せを夜燈を燃さず口ハ毘盧の五字を絶さず
長寛元癸未四月五日坐なから化を第五世昭
玄を土州吾川郡香椎山郷の人なり姓ハ藤枝
氏父を源家の門族にして平治の亂ハ洛陽に戰
死を時に師三歳なり又十二歳にして母を喪
ふのち隣邑の正源寺玄格に從て兼安元年十

五歳にして落髪し名て理正と云安元元年十
九歳にして薗城寺に入〳〵衣を台教に染て心
を止觀に凝を治承四年兵火に羅る是より於〳〵
此山ハ潛て灌頂を道慶ハ受〳〵改〳〵昭玄と名
く一日示をハ心自證心心自覺心の文を以て
を此文を聆て心地自ら開悟を因て覺心と稱
を建暦二年源空上人ハ謁して心自覺心の文
を以〳〵談話を空稱嘆をるに輟をのち一軸を
附せらる其詞に曰く　　嵯峨皇帝崩御の

時弘法大師書し給ふ所の十遍（十遍も十念の義なり）大師曰く十念ハ十波羅密成就の義なり名号是なりと玄乃悟心を感して副書二榜と倶に附與せ（今常慶院に傳持せり）建保六年六月五日化せ第六世法燈圓明國師姓は常澄氏信州神林縣の人なり母常に子なきを悲みて戸隠の觀音を祈る一夜夢に大士の右の手にて燈を授くと覺て姙とし為り兼久元丁卯年誕生幼にして群兒と遊むせ年甫十五にして郡の神宮寺に入て薙染し貞元乙酉二十九にして東大寺に到る登壇受戒し作法灌頂を受て三月十八日當嶺に登り玄乃室に入て秘密灌頂を受て又金剛三昧院乃行勇（建仁寺千光の上足）に謁して祖教外の旨を受て傳法院覺佛阿遮梨に遇て愈密教を研て四十二にして甲州心行寺に寄偶し一夏床に宴坐せ一夕定中に胸間より許多の小虵を捉出せと出定の後心氣明朗なり建長元年四十三にして紀州由良の濱より船を發して入宋し覺儀觀明等

丨錫を飛丨て名蘭勝地を禮を適本邦の源心
に値て明師を問ふ心の曰く無門和尚も一世
の棟梁なり往く禮をつゝ即ち率て護國の無
門は抵る門の玄我這裏も無門なり何きの處
より入るや對て曰く乃ち無門の處より入る
門の曰く汝の号も何そ對て曰く覺心なり門
即ち偈を示丨て曰く心即是佛佛即是心心佛
如如古へは互り全に亘ると遂に辞丨去るに
及て對語録と法衣を與ふ帰船を浮ふるに難

風帆を漫を時は來より受来る觀音の小像
り衆と俱は一心に唱名を忽ち月輪檣乃頭に
現丨上下そることと再三風濤頓に息て難を免
らる同六甲寅年當院は帰る明年禪定院金剛三昧
別院勇擢てゝ席主とを康元丙辰年　後深
草院の敵願を銜んて近衛藤相國の命に依く
堂宇を剏建丨宋國より持来まる西竺の鑄像
を本尊とす此尊の靈異近衛櫻の禪國の聰に達せ丨故なり　前佛者西
光院は傳持せ丨千手觀音を安置を北像ハ一

時師西光院に往く觀音二像在りけるを請く
曰く願くハ大師の真刻を與へよと主諾を明
日是を送里来く曰く昨日の請に應をと師の
曰く此像を定て大師の作なら子對て曰く再
り像勃然として曰く我ハ大師の作にあらを
と主慚謝して曰く予實に言を負り常ハ真作
を奉るつゝと師の曰く言有の像實ハ是生身
の大士なりとて乃ち安置せり 初め基趾を平
らる處に一の石函を得たり是を披けも上品
上生とゝふ琵琶形の文字粲然として存せり
遂に 天聽に達して上品上生の石額と覺心
上人の永宣旨を下し賜ふ 並ハ是藤相國の奏達り依くなり 故
ハ安養寺と号を同年書を彼の無門禪師に呈
をるに水晶乃念珠を附を則ち回書に曰く百
八乃摩尼顆々圓なり遠天に鼻孔一齊に穿つ
恒河沙數乃佛菩薩毎日呼来て一圈に跳らし
むとゝ又紀乃由良の鷲峯ハ遊んて閑寂を愛
を此山ハ妖鬼あり 師到の日是を降して為に

五戒を授く文應元庚申の祀熊野妙法山に詣
るに白日に星見えて祥雲峯に横さまる弘
安元戊寅紀州野上の荘の八幡宮木工の女子
に託して師を召く往て問對せること十數語
其中に經論乃疑しきを擧るに神一々部析し
て示誨肝に銘を同辛巳　禪林上皇詔書再三
して洛東の勝林寺に居せ〜る時々召して法
要を探り給ふ然きとも喧雜を厭ひて潛に南
紀に帰る同乙未花山の藤の師継妙光寺を建

て師を居せ〜む　天皇優禮懇請し給ふ奏對
なり又潛に南に帰る正應四辛卯衆の為に説
法を時に白青空に雷鳴震動し寶珠二顆鷲峯
紀の由良の山なり東南の嶺に隨つ則ち埋く山門の鎮
とす因て紀の國造淑文日前宮の神主なり雨珠記を作
きり永仁六戊戌十月十三日疾なし人と語せ
ること常の如くにして泊然として逝せ八箇
日其貌ち生るゝ如く故に棺を留む且五色の
舍利を得たり壽九十二法臘六十四也一條禪

閣乃和歌う

誠にも尊ときことゝかもくをたうとぶは老ちとき〳〵

又國師の門弟に千手上人といふあり俗姓は那須野名は親張奥州の人なり代武官さう長〳〵て清水谷一齊に從ふて史書を讀氣禀豪俠にして武術敵なし康元元丙申年三十六にして熊野那智山に詣て花藏院に宿せ院に小童あり進止鄙〳〵らせ一度見て中心痛むことあり如〳〵兒も亦去らせ卒爾に問ふ院主答て曰く吾先小妹有り洛に往く宮女となる彼き密に相知るものあり那須の七郎親張といふ已にして姙免り其夫の曰く吾生國に帰らむと也必人をして迎ふつゝと三年を經きとも終う信なし彼き病て死す兒孤露にして憑つきなし予これを養育せ今年十二なりと聞く哀涙禁せも曰く吾も其父なりと則ち家目に命して曰く明日此兒を將ゐて州に還り宜く家系を嗣しむつゝと其終夜亡婦を懐ひ又世栄

を厭ふの志を發せ夢に神人来て告て言く汝
前生に佛縁あり正に今宿善開發の時なり早
く道に入て佛門を弘通せつゝと覺て感喜骨
に徹せ則ち髻を絶て児の枕の頭に棄て徑ち
に高野に攀り覺心を拜して師とし三月十八
日に薙染し慈忍と号く密教を受學し両部灌
頂印可を蒙り又行勇闍梨に謁して禪密二教
を研し兼て念佛門を修せ正安二年四月二十
八日多寶塔を落慶せ塔の本尊金剛界大日如
来せ東寺増長院重圓僧正より附せる所則ち
大師の真刻なり曾て般若三昧を修せるに其
行道乃影池水に現す則千手觀音なり人多く
こゝを見る故に世呼て千手上人といふ徒衆
乃曰く千手院谷觀音ハ傳へ謂ふ大師より三
百年已前に此地に在り今堂宇廢頽せ師是を
慨善せつゝと即ち彼地に移りて中興せ明年
二月十八日堂宇成る院を号して本願といふ
同四年四月十五日化せ康元中國師上都より

山より帰る乃日忍の閑を愛して茅屋に禅を修
せるを見て莞爾として吟あり　法燈國師
おのほから心のそむく身の住う茅ゝ屋もたれ有あけの月
返し　慈忍
むのほから心もそなへそなへ寿ゝ茅ゝ下葉の露の月影
第十葉大阿闍梨曾眼者　醍醐後帝第十
七の皇子近衛家衛公の猶子なり天和二癸巳
年甫十二にして世の動乱を避て潜て登山し
て達玄闍梨の門に薙髪を従者唯二人のみ其

餘人敢て知るものなし藤公より〳〵存問を通
せ十四にして師の顧命に依て寺職を主る十
六にして金剛界の加行を始む奥院に詣して
看経の間夢に廟戸忽ちに開けて大師告て曰
く饑渇の衆生の為に卿茶湯を供し玉へと四
面を仰瞻るに諸佛雲聚し已身の所在を知ら
せ頃刻にして覺たり維時延文二年五月朔日
なり爾来毎月朔日より五日に至るまて茶湯
を當院より供せ以て恒式とす二十一歳より

て密嚴院覺深遠祭ゝ灌頂を受け三十二にして大日經を講ぜ一山傾き聽し性苦修に堪ゝり終に至るゝて誓て山を出ず應永二十癸巳二月八日薨ず齢七十一法夏六十なり第十九代明淳に至ゝて代々覺心上人に号を継く且恒例として山内乘輿一色衣を着ず慶長十五年に至て停ぬ

什物

和歌 一軸 陽光帝震筆 詩 一軸 後深草帝震筆 勅額 後深草帝乃勅なり 和歌

一軸 近衛准三后の筆 般若心經 一軸 近衛家文公の筆 同經 豫樂院准后の筆 祈願文 一紙 同筆 香炉 鳥形なり 近衛家寄附 卓圍 唐織なり 同家寄附 袍 近衛大解脱院の服 飛鉦鼓 其實ず磬なり 法燈殿小通夜し祈念せるに定中に神親手ら是を授けらる一時洛東勝林寺ゝ殘し置て當國師熊野ゝ詣し神院に帰るに奇なる哉情心有か如し師を慕ひ空を飛来て本堂の側今の鉦鼓の芝是なりに落て光りを放つ人其神なるを感して飛鉦鼓ともいふ 法衣 法燈國師宋より持来 袈裟 上ゝ同し 念珠 上ゝ同し 高野記 一卷三寶院門跡の筆 勸進帳 仁和寺道永親王の筆 弘法大師背姿影 上ゝ自筆の礼字あり 千手觀音不動尊地藏尊 一幅澤磨の筆 白衣觀音 一幅知圭の筆

龍虎画二幅對如主の筆　龍繪一幀陳前翁の筆

○密嚴院

本堂桁五間梁四間　本尊金剛界大日如来弘法大師の作

不動明王

護摩堂本尊不動明王往古東寺西の院本尊なり興教大師の作

内道場本尊多聞天興教大師の作

興教大師水鏡像東府護持院より納む其書に曰く密嚴院者興教大師修練之霊場也是以命京師佛工摸写水鏡之尊影幸憑洛西隠栖僧正専戒加修黙眼以寄附之唯願倍増法燈而已寶永三歳丙戌孟秋十有二日江城護持院僧録前大僧正法印大和尚位隆光寶永三丙戌仲冬吉旦黙眼加持了智積院中興第十世退隠僧正専戒印

僧坊桁十五間梁八間　玄關門　倉庫二ヶ所

鎮守社稲荷大明神興教大師勧請也今此所を稲荷改とゝ　開基堂方二間

覺鍍池上人終りを寺徒其始祖に配せると嫉んで是を撰せんとして上人を責む上人逃れんと欲して此池中に入龍生院の龍池へ出でゝとなり故に覺鍍池といふ

開基興教大師字を正覺名を覺鍍當院に住せる故に密嚴上人と号す肥前州の人なり伊佐

氏平兼元の息幼名を稱千歳丸嬉戯神佛を禮
を夫永元庚寅十月十六日年十六にして薙染
し仁和寺成就院大僧正を拜して受戒を一夜
夢り貴婦人来り頂を摩て曰く他山に於て大
に密教を興さん我汝を擁護せ〻吾を春日
明神也と又異僧来て告く曰く早く我山に来
る〻〻と弘法の靈夢に因て高野山住棲の志
頻りにして永久二甲午十二月晦日年甫二十
にして西郊仁和寺を辭して此山に到り高野

大師の廟を拜せるり定中に高祖現して曰汝
當山り来り教法を興し智燈を挑ことを我先に
知り早く志を達せ〻と正覺感喜し明寂上人
に從て秘密灌頂等を受し大治五年伽藍建立
の願を發して　帝に奏せんとを嚮に
鳥羽帝御惱の時潛に弘法大師り祈ことあり
御夢に一人の沙門南方り来り手に柳枝を
執て香水を灌くと忽ち　御惱差たり　鑁の宮
門り入るを　御覽あるに其儀相全く夢の僧

に同じく其来る所南山なるを以て　敵信
日を追て熾なりと又　御夢に白蓮殿中の某の
屢に生ずると其后　詔に應じて鍍昇殿なる
を彼白蓮の生ずるに屢に坐ず　敵感彌深
し大治五年　勅を下して當院を創建せしむ
四月八日落成を紀州應賀の荘一万石を附せ
らる　勅して大傳法院を建立せしむ則三十
六院の學所にして大傳法會を設く此時高野
両派に分り　寄厳院の門徒を傳法院方といひ
其餘の衆徒を金剛峯寺方と

然るに覺卓絶の徳たるに依て　勅して両座
主を兼しむ寺徒其両座主たるを憎み傳法院
の學法盛なるを嫉んで覺を退けんと鼓噪せ
趨て堂に入るに覺を見ずして只不動尊二像
あり寺徒相議して一像も必覺ならむと雖を
以て是を刺に血流出たり故に覺なりとして
拘へ去るに覺に世ならずして不動の像なり
雖も亦不動と云　寺徒神奇を見て感屈せ又信
根来山にあり
貴山に詣して菩提心堅固の祈願をなすに毘

沙門天形を現じて寶珠三顆を授く其後根来
山に大伽藍を建立せ行狀元亨釋書本朝高僧
傳等諸記に委悉なり依て今略せ康治二癸亥
十二月十二日寂せ齢四十九興教大師と謚す
什物
白衣五大尊 一幀弘法大師の筆 不動明王 一幀弘法大師の筆 能作性珠 一顆真教大師の筆 倶利
迦羅不動両童子 三幅對岩厳上人の筆 弘法大師影 五智坊融源僧都の筆 興教大師影 一幀座禪乃姿容を自ら命じて画せしむ上
に讃あり融源僧都の筆 般若心經 弘法大師の筆 同經 濟深親王の筆 三
社記宣 近衛三藐院の筆 扇面 和歌同筆 屏風 二双詩歌同筆 浄土
曼荼羅 天平寶字七癸卯六月二十三日中將姫佩太納言廣のさめる神女来て蓮の
糸を以て是を織る真教大師の所持中將姫の歌に
暮羽鳥あやしく思ふ極楽をたりあるとして誠をそみる
布袋画 一幀讃共に一休の筆極札あり

○福生院

本堂本尊大日如来 春日の作

護摩堂本尊不動明王 興教大師の作

○内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十二間 梁八間 門 倉庫 鎮守社 稲荷大明神

開基兼海僧都 興教大師の入室なり

○壽量院

本堂本尊無量壽如来 行基の作

護摩堂本尊愛染明王

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十二間 梁七間 門 倉庫 鎮守社 八幡宮

開基 知らず 中興圓慶上人

末寺 濃州方縣郡三谷銅村 法花寺 同 山縣郡岩井村 延筭寺

同 同 太郎丸村 新光寺 同 同村 船國寺

○如来藏院

本堂本尊聖觀音 弘法大師

護摩堂本尊不動明王

僧坊 桁八間 梁五間 門 長屋造り

開基（知らず）　中興圓慶上人

末寺　摂州川曲郡神戸地子町　福泉院

○上池院（萱堂の本院覺乘院の跡なり）

本堂　桁五間　梁三間　本尊大日如来　春日の作

護摩堂本尊不動明王

内道場本尊地藏菩薩　弘法大師の作　大坂の住山中某（鴻池の祖なり）家に傳つて常に此地藏尊を信仰し供養せり正保三正月児疱瘡にて死せり父母哀歎を其夜夢うつに此尊現して告て曰く汝悲むことなかれ我加持して此児を活生せしむつと

て錫杖を以て打ちふと夢覺たりけるに児の泣聲して實に蘇息せり霊驗肝に徹し二十一日に尊像を捧負して當院に來り宿性阿遮梨を拜して薙髮し宗圓と名く只此尊像を供養せるを事とせり慶安三寅年十二月廿日死す

僧坊　桁十二間　梁八間　玄關　表門　通用門　倉庫

開基（知らず）　中興圓慶上人

什物

○後深草帝龍影　一幅　法燈國師の筆　短刀　三条小鍛冶宗近の作

加藤重氏及婦并石堂麿影　三幅　源空上人の筆

末寺　紀州有田郡中原村　善福寺　同　揚川村　觀音寺

同　境川村　圓福寺　同　尾州海東郡今村　觀音寺

○千藏院

本堂　桁五間　梁四間　本尊勢至菩薩　弘法大師の作　脇士も阿彌陀佛　行基の作

なりけもしも道俗疑ひ怪しみけるに元祿七年

住持堯應江府に在るに五月十三日の夢に

此尊告て曰く我往古より數百歳本尊たり

何そ今座位を改るやと覺て奇とも明日書

札来るに菩薩を中尊とし如来を脇士とす

ること佛意に叶ひ難きに似たり故に吉日

を擇らんて改て如来を本尊とせんと應驚

き夢を感じて書を以てこれを停む

護摩堂本尊不動明王　弘法大師童形像　自作

内道場本尊地藏菩薩

○僧坊　桁十七間　梁十間　玄關　表門　通用門　倉庫　二ケ所

開基　知らず　中興圓慶上人

什物

昼茶羅　二幅金胎後宇多院の震筆　三寶荒神影　一幀弘法大師の筆

人物画　三幅對馬遠の筆

○福壽院

本堂　桁五間　梁三間　本尊十一面觀音　菅相丞の作

護摩堂本尊愛染明王

○内道場本尊弘法大師

僧坊 桁九間 梁七間 門 倉庫

開基 上ヨリ間一

末寺 三州吉田 毛町 不動院

同 勢州鈴鹿郡 岡田村 西福寺

○成就院 今モ廃 亡モ

○善福院

本堂本尊彌勒菩薩

護摩堂本尊藥師如来

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁七間半 梁五間

開基 知ラモ 中興圓慶上人

什物

屏風 一双 探幽の筆 花器

○地蔵堂延命寺

本堂方五間　本尊地蔵菩薩弘法大師の作　縁日三月十九日

護摩堂本尊不動明王智證大師の作　弘法大師自作

僧坊桁七間梁五間　表門　通用門

開基弘法大師なり　當寺本尊も世に引導地蔵

又も顧の地蔵尊といふ承和二年二月十九日

大師自ら作らせ給ひ一宇を建立し爰に安

置しまふ是則當来の衆生往生の素懐を遂し

○めんとなり　今に到り満山の緇素奄迦の日必

葬棺を此堂前に止む又大師入定を哀み顧て

眸を右辺に轉しまふ其相好肉身の如し夫優

頻利檀の霊像も歩みを運んで世尊を迎ふと

ゝせ豈仰さらむや圓光も大師天の川辨賊天

に運歩し擁護を乞ふに天女如意水精牛王の

三珠を木盆に盛て與へまふる天女の從者是

を惜みて帰途を追ひ一顆を乞ふ大師則ち水

精珠を放擲しまふ其より潤澤涌出し清流滔

々たり俗に此所を滝の尾といひ玉を惜める

地を惜み坂とゝふ木盆を此尊の圓光とゝ玉を傳へて寺寶とせ

什物

珠玉 二顆由来縁記に見へたり 大五鈷 惠果和尚より大師に附屬ゝ玉ひ 辨財天 一幀弘法大師の筆 不動尊 一幅上に同ゝ 故に御請来五鈷とゝふ

観無量壽經 一卷上に同ゝ

末寺 摂州川辺郡神戸村 隨龍院

同 吉祥院

同 清光院

寶幢院谷

○光明院

本堂 桁五間 梁四間 本尊阿彌陀如来 安阿彌の作箱根山より出現

護摩堂本尊不動明王 定朝法橋の作 毘沙門天 運慶の作

内道場本尊地藏菩薩 弘法大師の作古へ本堂の本尊なり

僧坊 桁十三間 梁九間半 書院 山水の画等渓の筆 上段 山水光信の筆

玄關 方二間 表門 唐門造り 中門 通用門 長屋造り

倉庫 二ケ所 鎮守社 烏瑟沙摩明王 売倉 前阿州太守家政の霊廟を祀

を國端彦大明神と称す 鐘樓方二間 隔室桁四間梁三間

開基大進法橋行清も三井の長吏八條宮圓惠法親王の法弟なり壽永二年親王後白河院の御子なり及び明雲大僧正天台座主俗姓久我大納言顕通卿の子なり 倶に後白河院の御所法住寺殿に在りて木曾義仲の兵災に羅て薨し給ふ壽永二年十一月十九日 爰に清也哀聲を含み悲戀を懷き尊棺を維の東山に荼毘して其御舍利を當山に窆み艸庵を營み長吏坊光明院と号す文亀の頃尾州蜂須賀小六正昭乃息登山し第十一世道雄法印に隨從し雜染して法印實道と号し秘密の玄奥を探て當寺に住職を享禄の頃同姓正勝の舍弟正信も實道の法弟と成り常林と号す天正十六年前阿州太守家政父正勝造資のため同州名東村に於て百石の地を永く附して三寶物とす慶長年中由ありて家政入道し蓬庵と号し當院に閑居す同十九年住持快尊法印に示して一七箇日の間太元明王の護摩を修し利勝將

軍を祈らしむに穢多崎の合戦の砌南方より
餓々たる煙り来り敵兵乱れ破れて同姓至鎮
軍功を現せしとなん同年一宇焼失す依て
家政再建せ又古来より堂宇に卍字の紋を附
あるを因て家政の紋を改め卍とせ是子孫末
葉に至て舊縁を忘れさらしめん為とやゝ文
禄の頃相州小田原の住士飯田仁左衛門尉道
平又ハ阿野氏猟遊のたゞ幽谷に入りしに霊光あ
り其處を穿ち見るに弥陀の像を得たり感喜

限りなく我家を荷負し来る或夜道平に告て
曰く我を高野に送るべしと示現あらたなれハ
自ら守護し快尊の徳行を慕ふて此院に安置
せ今本堂の如来是なり

○

什物

毘沙門天一幀弘法大師の筆前阿州太守蓮
菴入道年来持念の尊像なり永く
當院に附して若干の料を寄
せて國家安穏を祈らしむ
大元明王一幀弘法大師の筆阿淡太守至
鎮の寄附来由縁記に見へたり
五大明王一鋪弘法大師の筆遠州久野入道
宗安寄附せ今勢州田丸の城主也

彌陀名号 一軸 熊谷入道直實の筆 淡州稲田九郎兵衛寄附

火天画 一幀 弘法大師の筆 阿州大龍寺に於て止火のため染筆したまふといふ

摩多對文 一卷 真雅僧正の筆 觀音 一幀 牧溪の筆 山水繪 一幀 周茂叔の筆 黒跡 一軸 近衛信尹公の筆 花鳥画 三幅物 雪舟の筆 虎繪 二幀 雪村の筆 書札 小早川隆景の筆 太刀 二腰 銘 栗田口阿州至鎮の所帯

○佛心殿院

本堂 護摩堂附 桁四 本尊大日如来 定朝法橋の作 間梁六間

護摩堂本尊不動明王 智證大師の作 地藏菩薩 弘法大師の作

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十六間 梁九間半 表門 通用門 倉庫

鎮守社 辨財天

開基有雅法印 俗姓知らず 寛治元年六月五日寂す 中興應遍上人の時山名伊豆守時氏一宇再建す

什物

書札 尼子修理太夫の筆 水指 茂右衛門の作

○常慶院

本堂 護摩堂附桁七間半 梁五間半 本尊阿彌陀如来 千躰佛圍繞也

護摩堂本尊不動明王 弘法大師

内道場本尊地藏菩薩 聖天堂 方三間

僧坊 桁十三間 梁八間半 表門 通用門 倉庫 二ケ所

鎮守社 辨財天 鐘楼 方一間半 隔室 桁五間 梁三間

開基法花房 俗姓知らず 大治二年二月十日卯刻寂也

什物

十遍名号阿彌陀如来 弘法大師の筆 嵯峨天皇の勅に依て弘法大師筆にして尊像なり 寛文六年 叡覧に備へ奉るに 御信の餘り震翰を下し給

む 今は寶とす 毎歳七月十五日大衆を請して法楽を営み貴賤拝見を免し結縁せしむ

阿字 一軸 恵果和尚の筆 弘法大師影 一幀 真如親王の筆 石油の御眼なり

末寺 濃州恵那郡苗木 龍王院 同 佐々羅木村 神護寺

同 手賀野村 遍照院 同 飯羽間村 天王院

同 下飯羽間村 福生院 同 寺川戸村 清光院

○上珠院

本堂本尊大日如来 五大明王 滝川一益の守護本尊

愛染明王不動明王香合の内に安置木俣土佐守橘守勝の守護本尊

○内道場本尊弘法大師　大黒天弘法大師の作

阿彌陀如来黄金の鋳像なり柴田修理大夫勝家持念

僧坊桁十三間梁八間　表門四ツ棟造り四方唐破風なり　通用門

倉庫二ケ所　鎮守社辨財天

開基祐全阿遮梨姓族知らず　當院を北條家一宇建立し幾許の領地を寄附ありしとや其后牧野内匠頭信成再興してより牧野家檀契深し

什物

陀羅尼不動一幀滝川出雲守の持念　阿彌陀如来中將姫の作

書札北條家代々の自筆　屏風一双元信の筆

○佛藏院今ハ廢　○賢宗院同上　○蓮藏院客坊なり

蓮花谷往古花折院谷といふ

○誓願院

本堂桁五間梁三間　本尊阿彌陀如来春日の作京都三條に荒五郎といひし男あり或時由なく女を害せし其罪を懺せんとて發心薙染し當院に住せ其

頃而發心者来りて同ふ住み物語するに荒五郎宮せ女の夫なりけるを互に因縁を感道心堅固に勤めける此由三條殿の聽よ達感慮ありて當院を修補持念の阿彌陀如来を安置本尊と成るふ此如来て京師誓願寺の本尊彫刻の時佛工春日同き御衣木を以て作りたる故よ誓願院と号くとなり其后三位頼政一宇再建せ

護摩堂本尊不動明王 弘法大師の作

内道場本尊弘法大師

僧坊 桁十四間 梁九間 門 長屋造り 倉庫 鎮守社 稲荷大明神

開基俊海僧都 俗姓知らせ 中興明遍上人せ藤原通憲卿の息なり 始せ東大寺に於て出家十九歳にして此山に登るとな委〻元亨釋書に見へたり

什物

十六番神 一軸中将姫の筆 観音 一幀兆典主の筆

鴨画 一軸三位頼政の筆

○常住光院

本堂 桁六間 梁五間 本尊阿彌陀如来

内道場本尊藥師如来 不動明王 弘法大師の作

僧坊 桁十五間 梁十一間 表門通用門 長屋造り 倉庫

鎮守社 稲荷明神

○開基俊海僧都中興明遍上人 行状誓願院に當見へたり

院も 神君の御由緒ありて不時獨禮の格

式を賜ふ

什物

色紙 神君御詠 御筆なり

旅なれや雲のうへなる山こゑて袖のあらしに月を宿とせる

屏風 一双 狩野古信同 一双 元信の筆 蛇骨 往昔此山に毒蛇なり大

師是を降伏し玉ふに蛇の形躰碎て唯此頭骨のみ残りしとなり蛇柳の因由も亦是なり

○末寺 伊州山田郡阿波谷 慈眼寺

○明泉院

本堂 桁五間半 梁三間半 本尊阿彌陀如来 運慶の作

護摩堂本尊不動明王 智證大師の作

内道場本尊弘法大師 釋迦佛 閻浮檀金の鋳像

僧坊 桁十四間 梁八間半 玄關 表門 通用門 長屋造り

倉庫 鎮守社 辨財天

開基明遍上人行状上に見へたり

什物

阿彌陀經 明遍上人の筆 日輪大師画讃共に弘法大師の筆

天狗髑髏 由来知らず

末寺 勢州鈴鹿郡和毎田村 観音寺

同 紀州日高郡彌谷村 寶生寺

○寶泉院 今は廢亡せり

○滿谷院 上に同し

○十二光院 上に同し

○祥吉院 上に同し

○大鏡院 阿字觀堂と云

本堂本尊大日如来 弘法大師の作

護摩堂本尊不動明王 上に同し 阿彌陀如来 惠心僧都の作

僧坊 桁七間 梁五間 鐘樓

開基真雅僧正者此地に草菴を結ひ阿字觀法を修しゐ故に阿字觀堂といふ 近頃堂宇廢して本尊及び什物泰雲院に移せ

国立公文書館
National Archives of Japan

宮内省圖書寮文庫

紀伊續風土記并附録凡一百十五本記載詳悉セリ又
高野山ニ属スルモノヲ別録シテ七十七本トス今本書ニ就キ
其地誌ノ考証ニ備ヘキモノ十四本ヲ鈔録シ巻篇ノ後ニ附
ス総計一百三十本校正ノ次聊其顛末ヲ記ス明治八年十
月上浣

中邨元起 元起

国立公文書館
National Archives of Japan